

2024年8月5日 特別園内研修

「書くことと語ることの意味を考える」 ふりかえり

講師：松木健一氏（福井大学副学長）

実践を「書くこと」は何をもたらすのか。

実践記録は、ただ実践の営みを記録したり、実践を評価したりするだけではなく、実践者自身の学びを支えている。

実践を書く、語るという営み、語ることと書くことによって切り開かれる世界について考えたい。

本研修の目的

松木先生の講話をもとに、専門職においての書くこと、語ることの意味について対話を通して理解を深めていく。

参加者：松木健一 教授  
本園教諭 8名  
外部 9名

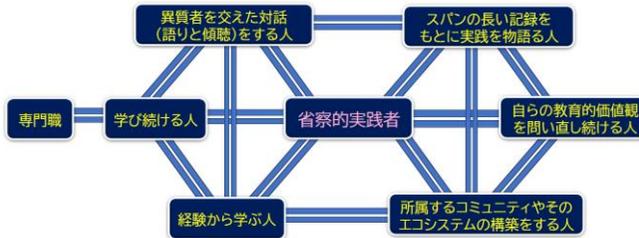
奈良女子大学附属幼稚園2024夏季自主研修

実践を深めるために  
専門職の在り方と学習者主体の授業を考える

実践論文を書くことの意味を中心に

松木健一  
福井大学

専門職とは何か

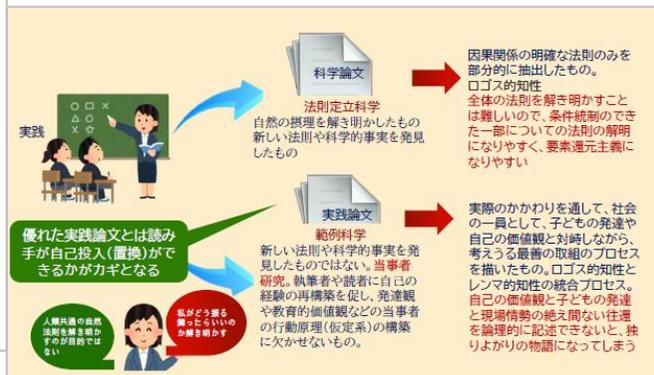
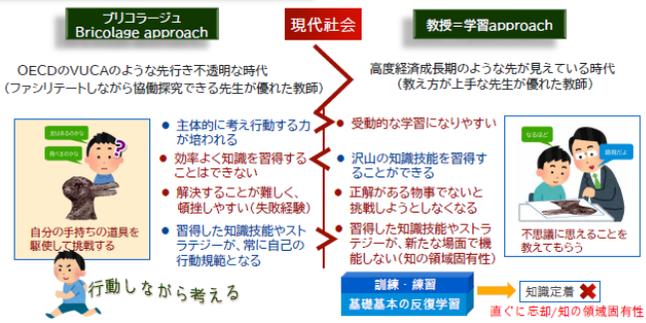


専門職について振り返る

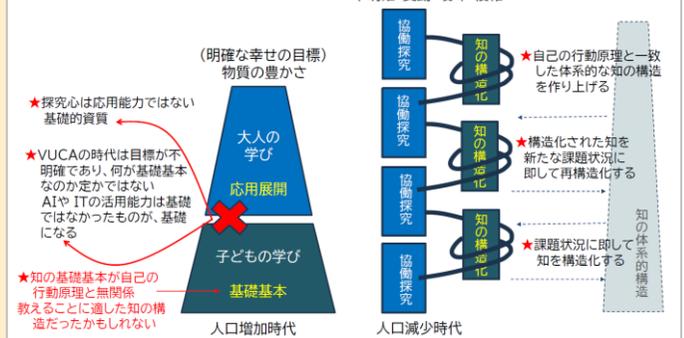
自分に当てはまる  
教師の姿は  
ありましたか？

1. 教師とは生涯学び続ける人のことである
2. 教師は省察的実践者である
3. 教師とは経験から学ぶ人のことである
4. 教師とは、たえず過去を新しく作りかえる人のことである
5. 教師は、一人では育たない
6. 実践を語り合う文化のない学校では教師は育たない
7. 実践を書かない教師は優れた教師にはなれない
8. 教師が育つためには、時々異質者を交えた対話が必要である

主体的で対話的で深い学びとは何か



時代の変化に伴う学びの変化



## 講話の内容からの対話（抜粋）

私はもともと書くことが得意だと思っていたが、書くことってこんなに難しいんだと思っている。ドキュメンテーションとか、いろんな書き方の方法が出ているけれども、書く中で当てはめて書いてないかとか、何かラベリングして書いてないかって違和感を感じた瞬間があって、ここの幼稚園に来て、枠組みにはめるのではなく、自分からこう生み出して文章を書くことってなんて難しいんだと思っている。思ってることはここにあり、切り取った瞬間に何か別物のようになったみたいな感じで、どこを切り取っていいか、託されているからこそ、その切り取るっていうことに書くことの専門性が現れる。

プリコラージュから始めようという話は、自分の中の持っているものを出して、自分の頭で考えて、体を動かしながら、そこで得たものを繋ぎ合わせてる段階なんだって考えた時、その子の学びは大きいだろうと思った。質的転換段階に行くためには多分教師の探究の姿勢とうまくファシリテートする力が必要になってくるんだろうなと思って、ここでどこを掴むかって、教師の力って大きいよなって思いながら、面白いけど、すごく難しそうだなって思った。

幼児教育の探究って人にとっていうか、ものとの探究の方がイメージとしては結構つかみやすいことが多いけれど、高校はどうして社会とか地域っていうところと親和性が高いのかっていうのがすごく疑問だった。商業というところでの学習もあるのかなっていうふうに思っていたけれど、この前ラウンドで実践報告させていただいた時に、いやいや幼稚園だって社会じゃないかって言われて、範囲は違うかもしれないけど、生きてる全てが社会でしょって言われた。確かにそうですね。今の3歳児の中の社会があって、そこでの探究があるとなった時に、ぱっと見高校の探究と違うように見えて、本質は変わらないんだなって思った。

## ふりかえり（抜粋）

「わたし」が「わたし」としてこの場で子どもとともにあること、他者とともにあることを感じるには、その多様なアイデンティティがありながらも、いまはどの自分であるかという感じ方を自覚しないと、認識のフレームを変容させていくことは難しいところもあるのかもしれないと感じる。

だからこそ異質な他者と語り、その中で感じたことを改めて書くことで言葉にすることが必要なのだと思う。

私たちは何のために言葉にするのか。松木先生の研修から、「書く」こと、「省察」すること、「対話」することの意味を再考した。自分のスタンスが「書く」中で現れること、その振り返る手段として、最終形として語る・語り直すという在り方があることを感じさせられた。

今までの私は「語り直す」ことで、厳密な過去ではない「記憶」を創り出して表現してしまうのでは、「純粋な過去」は取り出せなくなってしまうのでは、と考えていた。しかし、「語り直す」ことで私たちは「語る」「省察する」中では見出せなかった「過去の意味」に立ち返ることができるとは思わなかった。私は「物語る」ことを大切にしたいと考えている。それはきっと、物語る中で大切にしたいことを何度も確かめているのだろう。実践している私はその確かめていることを表現できているのだろうか。そんな問いを抱き続けながら歩みたい。

幼児教育ってという枠を自分達で決めるんじゃなく、いろんな異質な人たちと対話とかで理論的背景とかを学びながら、自分たちの保育を考え続けていく。それってやっぱり大事なことだなと思わせていただきました。

実践研究と科学研究の違いについて。自分が実践研究を書いたことで、科学研究との違いがより見えてきた。ボトムアップの実践研究と仮説検証の科学研究。私の中では、実践研究は科学研究よりも劣っているというイメージがあったが、実践を変えるには仮説検証だけでは難しい。経験したことから意味を捉え実践に返す。私達がしてきたことを言語化して残し、同じものを多面的に捉えることが実践研究だとしたら、実践研究の価値は大きい。